毘沙門天　（所要日数　９０日）

毘沙門天は仏様と須弥山（しゅみせん）の北方を守護する四天王の代表です。四天王がそろっているときは多聞天といい，独尊のものを毘沙門天といいます。インド神話のクベーラが仏教に取入れられたもの。毘沙門の名は「全てのことを一切聞き漏らさない智慧者」の意味を持つので多聞天とも称されます。日本の民間信仰では七福神の１つでもあり，福徳を司る神として広く信仰されています。

片手に如意宝棒，片手に宝塔を持ち、如意宝棒の頭には、如意宝珠という、衆生の願いのままに物心両面の宝を生む珠がついています。また、宝塔の中には八万四千の教えと十二部経が納められ、それを見る者は大いなる智慧を得ることができると言われます。

千手観音　（１００日）

生きとし生けるものすべてを漏らさず救う、大いなる慈悲を表現する菩薩です。千の手と手のひらの千の眼によって悩み苦しむ衆生を見つけては手を差し伸べる広大無限な功徳と慈悲から「大悲観音」、または観音の王を意味する「蓮華王」とも称されます。阿修羅や金剛力士などが属する二十八部衆を配下とします。

観音の中でも功徳が大きく、観音の中の王という意味で「蓮華王」と呼ばれることもあります。阿修羅や金剛力士などの二十八部衆を配下にしています。また六観音の一つに数えられ餓鬼道に迷う人々を救うといわれています。

十一面四十二臂（ひ）で表されることが多く、四十二本の手のうち四十本それぞれが二十五の世界を救うことを示します。手には宝剣、髑髏杖、水瓶など実に様ざまな持物（じもつ）を持ち、多種多様な徳を表しています。

釈迦三尊　　（３００日）

釈迦如来像を中尊とし、その左右に両脇侍（きょうじ）像を配します。両脇侍として配される尊像の種類は一定ではなく、文殊菩薩と普賢菩薩、梵天と帝釈天、薬王菩薩と薬上菩薩、金剛手菩薩と蓮華手菩薩などの例があります。日本では左脇侍（向かって右）に騎獅の文殊菩薩、右脇侍（向かって左）に乗象の普賢菩薩を配する例が多いです。

文殊菩薩

知恵を司（つかさど）る仏として信仰される文殊菩薩です。 知恵は純粋無垢な子どもの性格にたとえられることから、少年のような姿でつくられています。 頭に５個の髻（もとどり）を結うのは密教のスタイルで五髻文殊（ごけいもんじゅ）と呼ばれます。

普賢（ふげん）菩薩

普（あまね）く賢いという名の通り、優れた智慧で現世のあらゆる場所で人々を救済する仏さま。 幸せを増大させる増益（ぞうえき）にご利益があるとされています。また、女性でも悟りを開けるという「女人成仏」を説く法華経に登場するため、女性からの信仰が篤い存在でもあります。

魚籃（ぎょらん）観音　　（４０日）

中国唐の時代、魚籃（竹籠）に魚を入れて行商する美女が居り、大変美しいので若者たちは競って求婚しました。すると、 その美女は経本や経典を諳（そら）んじることが出来た者のところに嫁そうと言い、だんだんと諳んじる経本や経典の難度を高めて競わせました。最後に出題された経典を暗誦できた若者は一人でした。ところが、約束の婚礼の日に、美女は忽然と消えてしまいました（結婚後すぐに死んだという説もあり）。後に残っていたのは、黄金の観音像でした。
実はこの女性は、法華経を広めるために現れた観音とされ、以後、魚籃観音として信仰されるようになりました。この観音を念ずれば、羅刹（らせつ：人をたぶらかし、血肉を食うという悪鬼）・毒龍・悪鬼の害を除くことを得るとされ、日本では中世以降に厚く信仰されたとのことです。

蔵王権現（ざおうごんげん）　　（６０日）

蔵王権現は日本独自の山岳仏教である修験道の本尊です。開祖・役小角（えんのおづぬ）によって初めて祀られたと言われています。インドに起源をもたない日本独自の仏で奈良県吉野町の金峰山寺本堂（蔵王堂）の本尊として知られています。正式名称は「金剛蔵王権現」で「金剛蔵王」とは究極不滅の心理を体現し、あらゆるものを司る王という意味です。また、「権現」とは「権（かり）の姿で現れた神仏」ということを意味します。一般には１面３目２臂で、身体は青黒色とした忿怒相を表します。右手の三鈷杵（さんこしょ）は天魔を粉砕する相を示し、左手の刀印は一切の情欲や煩悩を断ち切る利剣を示します。左足の踏みつけは地下の悪魔を押さえつけており、右足の蹴り上げは天地間の悪魔を払っている姿、背後の炎は大智慧をあらわしています。日本百名山の蔵王連峰（蔵王山）は古くは刈田嶺（かったみね）と呼ばれていた山岳信仰の山でしたが、吉野から蔵王権現が勧請され、平安時代には修験者が修行するようになったため、蔵王山とも呼ばれるようになったとされます。

中宮寺弥勒菩薩（国宝）　　（４５日）

正式には菩薩半跏像（伝如意輪観音）といいます。半跏思惟（はんかしゆい）のこの像は、飛鳥時代の最高傑作のひとつであると同時に、わが国美術史上、欠かすことの出来ない存在です。また国際美術史学者間では、この像の顔の優しさを評して、数少い「古典的微笑(アルカイックスマイル)」の典型として高く評価され、エジプトのスフィンクス、レオナルド・ダ・ヴィンチ作のモナリザと並んで「世界の三つの微笑像」とも呼ばれています。半跏の姿勢で左の足を垂れ、右の足を膝の上に置き、右手を曲げて、その指先をほのかに頬に触れ、人の悩みをいかにせんかと思惟される清らかな気品をたたえています。